いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び
堀川のにぎわい

花見の名所　堀川

文化年間（1804～18）に、御普請奉行の堀彌九郎が日置橋の南北に桃と桜の苗木を植えた。数年経つとみごとな花を咲かせ、堀川を淡い紅色で染めるようになった。多くの人が訪れ、茶屋や料理屋・花見舟が出るようになり、名古屋一の花見の名所となったのである。京都から来た人が「かほどの長き並木の桜は都にも稀なり。東国にての珍らしき花見なり」と語ったと伝えられている。

さらに安政7年（1860）になると、堀川の長畝（現：朝日橋～景雲橋の東岸）にも植えられた。

納屋橋から下流を望む　『桜見与春之日置』（名古屋市博物館蔵）

今の若宮大通付近からの風景　『桜見与春之日置』（名古屋市博物館蔵）

日置橋東南からの風景　『尾張年中行事絵抄』（東洋文庫蔵）

日置橋の西北風景　『桜見与春之日置』（名古屋市博物館蔵）

日置橋の賑わい　『尾張名所図会』

明治28年発行『名古屋明細全図』には、桜の名所として堀川

水主町変電所は、元お殿様の花見屋敷跡

家督を譲り隠居していた10代藩主の斉朝（なりとも）も桜を見たがった。このため、中部電力水主町（かこまち）変電所の場所は当時藩士の屋敷であったが、弘化年間（1844～48）に上地をさせ、改修して日置御屋敷にした。門長屋に透き見の窓を作り、花を眺められるようにしつらえてあったという。